

高津区おはなしアーカイブ

●河崎 千代子（かわさき ちよこ）さん

大正11年生まれ 96歳
川崎市高津区宇奈根在住



◆生い立ちと家族構成

宇奈根で生まれ、宇奈根で育ちました。妹が4人、私が長女です。男も5人生まれたのだけど、生まれてすぐ3人が亡くなり、2人の弟は2歳くらいで逝ってしまいました。亡くなった年は違うけれどこの2人、すぐ下の弟と一番下の弟は9月4日が命日。だから、命日が来ると仏様にお花を供えてあげてねって、お嫁さんに言っているの。

父(秀吉)は、13歳のときに父親(卯太郎)を亡くしました。まだ40代でしたがお酒が好きでね。同じ月に秀吉の祖父(幸七)も亡くなり大変苦勞したそうです。そんなわけで私は女でしたがこの家を継ぐことになりました。昔は家督を継ぐこと

が必要だったんです。

結婚は、持っている蔵の数だとか、釣り合う財産のある人同士であるのが良縁だという考え方もあり、親戚が縁組みをしてくれました。昔はそうだったの。あそここのうちは蔵がいくつあるからって話し合っただけ、資産持ち同士で嫁にやったり婿をとったり、そういう親戚ばかりでしたね。

〈写真 千代子さんの父親と母親〉



◆小学校

入学した小学校は高津尋常小学校です。妹たちも全員高津尋常小学校に通いました。当時は高津、向丘、橘、稲田と4つあった尋常小学校のなかで高津尋常小学校の講堂が一番大きかったの。そこで運動会があると青年団も来ていました。

高津尋常小学校に6年、高等小学校に2年、全部で8年行きました。私のときは1学年100人以上いたかしら。全校生徒の数は知りません。授業は普通だったと思うけどね。昔は勉強しすぎると「おっちゃっぴ」さんみたいになるから良くないって、女の子はあんまり勉強しないでいいという風潮もありました。

小学校のときのお弁当は、麦とお米を合わせたご飯が多かったけど、冬はお餅を焼いて海苔巻いて持って行ったのを覚

えています。学校の火鉢で火をおこして、その中に入れておくと温まるの。家では麦も米も作っていたのでお弁当にはそんなに苦労しなかった。

◆子どもの頃の遊び

男の子たちは「水雷母艦」という遊びをよくやっていました。道路に立っている電柱を陣地に見立て、陣取り合戦みたいな遊び。昔は着物を着ていたから、帯を締めているじゃない、その帯の間に竹の剣を挟んで、水練とか母艦とか役割があったみたい。女の子は縄跳びとか、毬をついたり、羽根をついたり、お手玉で遊んだり。お手玉は「いっちょすい、にちよすい、さんちよすいできた」と歌いながら遊ぶのです。うまくできないと、負けてしまい、お手玉をとられちゃうの。そんなことがありましたね。

お正月には羽根つき「ひとりきな、ふたりきな、みていきな、よってきな、いつきてみても、むずかしい、ななこのおびを、やおにしめ、ここまでどうぞ、おめでとう」数え歌を歌いながらよくやりました。

雪が降ると男の子達は雪合戦をやっていました。それから、厚ぼったい袋があるでしょ、それを持って多摩川の土手を滑ってソリみたいにして遊んでいたらしいです。

◆多摩川の思い出

夏になると多摩川に先生が連れて行ってくれましたね。当時、多摩川は向こう岸に行くのは船じゃないと渡れなかったの。水量が多くてね。私が小さい頃には、

砂利船という大きな幅の広い船や、機械船というのがあって、多摩川の砂利を何台もの機械が入って取っていました。朝7時くらいから砂利を掘ってね。使えるのは砂利だけでしょ、それをとってしまふから大きい石や、岩だけ残っちゃったでしょ。多摩川は今みたいに浅くなかった。

◆戦争

戦争中は、火事になったら水かけるんだって、バケツリレーを町会でさせられました。班長さんと、男の人も何人か居て、女の人は手ぬぐいをかぶってもんぺはいて、広い公園みたいところでバケツリレーをやりました。

私は跡取りだから学徒動員には行きませんでした。すぐ下の妹は工場に行かされました。工場の付近にはイノシシがいて追いかけられたりしたみたい。艦載機で撃たれたり、お嫁さんの実家が空襲に遭ったり、親戚の家が焼けたり、寿命が縮まるような思いもしました。庭の見えないところに防空壕を掘って、母親の箆笥も防空壕の中に入れました。

空襲に遭った叔父さんは、リヤカーを引っ張って逃げてきたの。焼夷弾がまるで雨が降るみたいだったって、ザーザーと雨が降るような音がしましたって話をしていたことを覚えています。あんな時代が来たら、今の人は我慢できるのでしょうか。怖い思いをして、食べるものもない。口では言えないけど、体が震えて、縮まってしまふような経験。どこに逃げ隠れしても上から爆弾が落ちこちてきたらいちころだもの。この辺は、軍隊とか

津田山に高射砲部隊とかあったから、頻繁に狙われたらしいですね。

終戦のときは家にいて、家族みんなで玉音放送を聞きました。下を向いて、誰も何もしゃべれなくて、無言でしたね。そのあとお勝手に行って、三升のご飯を炊いたんです。もし何かあればおにぎりにして持っていればどうにかなると。とにかく、この先どうなるかがわからなかったから。とりあえずご飯を炊きました。おかずは梅干しでもなんでもあるからねって。あのときは大変だったのよね。

◆学校卒業後

橘屋さんとか溝口神社のそばの同級生とか、資産家の女の子は上の女学校へ行きましたが、私はここで、家を継ぎました。野菜をつくり、神社の前に小さい市場があったので、持って行って売りました。そのほか瀬田や、多摩川を越えて、用賀の方にも行きました。あの頃はリヤカーで運んでいました。いまだに祖父の名前が書かれたリヤカーが家にあるので、まだ使っています。以前あったリヤカーは誰かに盗まれちゃってね、そのあとはしっかり名前をつけたのです。

昔は味噌もお醤油も自分のうちで作っていました。久地駅のそばに機械を持っている醤油絞りの人が年に一度、秋になると来てくれるの。大きな樽に絞ってもらってね。美味しかった。

養鶏業をはじめたのは、私の息子が生まれたときからです。裏にいた河原友作さんという人がよく面倒を見てくれました。畑を少しつぶして、鶏小屋を立てて。最初は100羽からはじめ、150羽に

増えていきました。

私たちが子どもの時分はこの辺は桃の栽培をやっていたの。梨栽培もやってたけどね。土が変わってやらなくなりました。この辺りではお米はあまり作っていないの。田んぼが少ないからね。川の淵だから水の便がいいかと思うけど、田んぼに水がはいってこなかったから。

宇奈根の村は小さいけど、もともと大きな地域でね、川向こうの東京にも宇奈根があるのよ。明治の頃、多摩川の上に郡境が設置されたので、あちら（東京）とこちら（川崎）に分かれてしまったんです。夏のお祭りも、私の家は川向こう（東京）の氷川神社まで行っていたの。

戦後は農地解放があって、この辺りも解放で土地持ちになった人が多いです。うちは全て江戸時代からの地所だから、解放にはなりませんでしたが、それが今周りにある財産。学校があるあそこのほうからこちらの道路、土手のほうまでうちの土地がありました。それはそれなりに大変だけど、おかげさまでみんな元気でやってこられたからありがたいと思っています。私は女だてらに家を継いだので「女のくせに天下様だから威張っている」ってよく母に言われたけど。それは仕方がないわよね（笑）。

（平成30年10月17日取材）